

# 大会講演

能登半島地震から約一年、震災復興一周年を記念して、和倉温泉観光会館にて、和倉温泉短歌大会を開催しました。

今年で七回目を迎えた伊香保短歌大会は、伊香保温泉「ホテル天坊」での開催でした。

両大会ともに、お集まり下さった方々が熱心に耳を傾けておられた講演を、今号では紹介いたします。

NHK学園生涯学習フェスティバル

## ●和倉温泉短歌大会

と き／二〇〇八年四月二十三日（水）  
ところ／石川県七尾市

演題 文語の歌と口語の歌

講師 岡井 隆先生……3

## ●伊香保短歌大会

と き／二〇〇八年六月十二日（木）  
ところ／群馬県渋川市

演題 短歌と笑い

講師 小池 光先生……13



# 「文語の歌と口語の歌」

岡井 隆

「文語の歌と口語の歌」という題を出したのですが、歌をお作りになつてゐる方は必ずこの問題にぶつかられるだろうと思つてゐます。僕が最初に歌を作り始めたのは終戦直後で、もちろん多少、新しい試みで口語的な発想はありました。ありましたけれど、それはもう本当に寥寥たるもので、ほとんどが文語的な歌でした。

例えば、万葉集などを基幹にして、島木赤彦さんの「歌道小見」という入門書とか、僕なんかは斎藤茂吉さんも多少あるんですけど、いずれにしましても、まずそういう文語的な作品をもとにして、その真似をしながら歌を作りなさい、ということだったんですね。

それで六十何年経ちました。今や携帯短歌、若い人たちの集まりなんかに行きますと、作品そのものも極めて口語調になつて

います。これは、歴史的に言えばいくらでもいろいろな話が出来ます。一九八七年の俵万智さんの「サラダ記念日」というのが画期的な働きをなしているわけですけど、それ以前にもっと長い歴史がありまして、明治以来ずっと、なるべく我々が話しているような言葉を使うということがありました。「今日ひと日」は、「今日一日」ということでしょう。「今日ひと日」なんて平生の会話で皆さんおっしゃらないでしょう。「今日一日」とか「今日中」とかいつているわけです。そういう普通の言葉で歌を作りたいと。

## 矛盾した欲望の世界

中西進さんという万葉集の大家がいらっしゃいますけれど、俵万智さんの歌がはやった頃に「万葉集というのは、要するに

「サラダ記念日」なんだよ」と中西さんが言うわけです。「そうなんですか」と言ったら、「まあね、だいたいあんな風にしゃべっていたわけですよ」と。古代の発音の仕方が違うというくらいで、現代語だということでは同じことだったので。

現代になって、我々は文語だ、文語だと言っているけど、俵万智さんがああいう歌を作るのは何の不思議もない。片方で日常で我々が話している言葉に近づきたいという意欲はどんな人間でもあるんです。

最初は小説でさえ文語調でやっていた。夏目漱石は割合早めに現代語の方へ移っていかれた。それでも、漱石の初期の「ロンドン塔」とかああいうのはみんな文語調であります。明治以来の文学者がいろいろ苦労して、小説が割合早く現代語になった。

そのことを「言文一致」というのですが、「言うこと」と「文章」とを一致させようという気持ちがあるわけですね。

詩の世界でもそういうのがあり、短歌でも五七五七七には違わないのだけれども、なるべく平生しゃべっていることに近い言葉で作る。俵万智さん以後、特に現代の若い人たちが携帯短歌やインターネットの短歌で投稿してきておられるのは、平生我々が日常使っているような言葉、特に会話体ですよ。恋人同士がメールでやりとりしている、あれをそのまま歌にしたいという、そういう意識があります。これが言文一致体に対する長い間の欲望ですね。

ところが、人間というのは矛盾した欲望がありますね。もう一つあるのですよ、欲望が。

詩の世界、短歌の世界というのは、普通の日常会話のレベルとは違う他の言葉、とりわけ詩的言語、あるいは短歌の言葉のこゝとを歌語といいますが、そういう言葉を使うのだと。例えば、「瞬間」ということをいう時に、「時の間」という。「時の間」というのが悪い。よい言葉じゃないか。

何でもかんでも現代語のほうに結び付けていく言文一致体ばかりがいいわけではないと。

極端なことをいいますと、枕詞というのがありますね。枕詞を我々が日常会話で使うわけがないでしょう。「たまきはる」というのがあります。「たまきはる、にはね、大根とかいろいるあるんだよ」といったら、まず頭が少しおかしい人に見られる。しかし「たまきはる」という言葉は——「魂が極まる」という言葉なのですけれど——いい言葉じゃないか。これはやっぱりどうしても歌の中で使いたい。「ひさかたの」というような言葉も、「光」をいうのに使いたい。現代語にはないがこの響きがとても良いというわけです。

片方で言文一致、つまり平生我々がしゃべっている易しい言葉に近づきたいという意識と、いや、歌とか詩というのは特別な言葉なんだ。しかも、上代からずっと伝わっている日本語の中で、もう現在使われなくなっている、消えてしまっている言葉だけれども、とてもよい言葉があるじゃないか。それをむざむざ捨てるのは惜しい。

この二つの欲求がせめぎ合うのです。言葉を探して歌を作る

現代の短歌の現状を見ますと、ある部分ではすごく現代語的な、つまり、口語的表現、口語というのはつまりしゃべり言葉に近い言葉なのですけれども、平生の日常会話語に近いというふうに取りつければよいでしょう。それから、文語というのは、定義はいろいろありますけれども、これも定義はどうでもよろしい。

「あしひきの」という言葉を必ず「山」というところへ持つてきたい。塚本邦雄さんの歌に「山川呉服店」というのが出てくるのですけれど、「あしひきの山川呉服店に夕日照り」とかなんとかいって、「山川呉服店」の「山」というところに、「あしひきの」という言葉をどうしても付けたい、というわけです。これくらい、会話離れしている特殊な言葉はないですね。それでも使う。

今、我々が詠みますいろいろな歌の中には、その両方が入っている。両方の気持ちがあるのだから、片方を無視してしまうと

いうのはどうなのだろう。

結論だけいうと、今の若い人たちの歌は、どれを見てもみんな同じように見えてしまうということに皆、不満を持っていて、いろいろおっしゃる。僕も全くそうだと思いますけれど、あれはね、結局、会話語のほう、つまり言文一致体のほうに寄っているからです。難しい理屈じゃなくて、それが一番使いやすいもんだから、それで作ってたくさん出します。

そうするとね、会話で使われる単語そのものが、これは言語学者が調べていますけれど、一生通じて300くらいですかね。ものすごく少ないのですよ。



ご夫婦で朝から晩まで「おい」「はい」「おう、あれ」「はい」……で通じてしまう。三つくらの言葉で済んでしまいます。夫婦仲が悪いかという別と別に悪いわけじゃない。コミュニケーションは極めて濃厚にあるのです。

「ちよつと行ってくるぜ」「はい、行つてらっしゃい」。どこへ行くのか、どこへ行つて何をやるのか、お互いに全部分かっているから、「ちよつと行ってくるぜ」で済んでしまうのですね。

300語くらいで日常のコミュニケーションは成り立つそうです。もちろんその中には「たまきはる」とか、「あしひきの」は入っていません。必要ないですから。非常に少ない言葉で会話はできる。その言葉だけで歌をたくさん作るわけですから、どうしても似てきます。

そこに根本的に短歌とか詩の世界に対する誤解があるかなあと僕は思います。会話で平生使っているような言葉だけで短歌を済ましてしまうということ自身に、問題があるのではないかという感じがします。近代の爛熟した文化の中で、多くの人の生活

は非常に平均化して、生活形態も極めて似ている。東京だろうが鹿児島だろうが北海道だろうが、コンビニがあつてそこで売られているものはほとんど同じでしょう。全国津々浦々を歩いている立松和平さんみたいな人が、「どうしてこんなにそっくりの家やら何やらがでちちやったんですかね」と言っていました。生活文化が一定しているということは、言語文化もほぼ平均してしまうのです。

東直子さんという非常に売れている若い、若いといつてももう四十代ですが、ずっと若い頃から書いてきた女流作家がいます。

うわごとで名前を呼んでくださったれば  
ゆきましたのよ電車にゆられ

相聞歌ですね。うわごとで私の名前を呼んでくださったれば、行きましたのにねえ、電車に揺られながら、という歌です。これは「うわごと」「名前を呼んで」「ゆきましたのよ電車にゆられ」、全部我々が日常語で使っている言葉をそのまま易しく言っています。それに対する穂村弘さんの歌があります。

震えながら海からあがるもういいや  
モスバーガーに眠りにゆこう

「ながら」というのがやや歌の言葉っぽいけれども、がたがた寒くて震えながら海からあがってきて、スキューバダイビングか何かやっていたのだと思いますけれど、モスバーガーへ行ってあそこで眠ろうやと言って、海岸べりのモスバーガーへ行く。全部分かりやすい言葉ですよ。

この二人の歌は、上手な歌です。

上手な歌ですけれども、他の人がこういう歌で行こうとなると、やっぱり穂村調、穂村模倣になってしまう。東さんそっくりの歌が大量生産されるということになります。

僕などは、これではどうかかなという感じがするんですね。やはり歌は根本的にどこかで、口語の、つまり言文一致体だけで済ませるわけではないのではないかと、思うのです。

会話語、平生我々が使っている言葉というのには、「あれ」とか、「これ」とか、「おい」とかで済む。「行ってくるぜ」で済む。「私は、どこそこへ行って参ります」と、

きちつと言わなくなっているんだね。省略の利いた世界ですが、それは短歌とか詩という世界とはちよつと違うんじゃないか。そう考えていきますと、やはり言葉にある程度探して、平生使われていないような言葉でも取り込んで歌の中へ入れるという努力を多少でもしませんが、歌の内容がどの人もどの人も同じような、平板な、ベタな表現になってしまいます。

そうしますと、なんだ、こんなのなら一人読んでおけば、後はもういいやということになってしまう。それではせっかく歌を作っているのにもつたいたいではないか、というのが僕の考えです。

### 自分で増やしていく語彙

では、これを解決するためにボキャブラリー、語彙ゴイですね。その人の言葉、特殊な言葉というのが何かないかということになる。一つは外国語ですね。外国語でも我々の知らないような高級な外国語ではなくて、日常の中に入っているのですが、ちよつと気がつかないような言葉を使ってみたらどうだろうか。



伊藤一彦さんは宮崎に住んでいらつしゃって、『微笑の空』という歌集で今度、追空賞をおとりになりました。六十四歳。この作品集は六十代の初めの頃の作品であります。

内福の人と思えりブルリングゆつくりとおこし語らふ様は

伊藤さんは、老人ホームとかケアハウスとかそういうところへ繁々シバシバと行って、八十年代、九十年代、場合によれば百代ですけれど、そういうご老人たちの短歌会を組織して指導をやつていらつしゃいます。毎年こんな厚い「老いの歌」のアンソロジーをお

出しになっています。この歌はそういうところで出会った老人の一人をスケッチしています。

ああ、この人は内側に幸いを持っている、内福の人だと。「内福」というのは、外側からはいかにも惨めに見える、あるいは不幸ということでいえば不幸の側に立っているように見える。だけど、いかにも満足している。その人の内面的なものもしっかりと満ちたりている。こういうのが内福ですよ。

この歌の中で注意しなければならないのは、「プルリング」です。「プルリング」ってことさらに言われると、え、何だったかな、なんて思います。

十数年前、「プルリング」というのが短歌の中へ出てまいりまして、私も最初、戸惑ったのですけれど、缶ジュースなんかの蓋開けるときに、指に引っ掛けてキュッと引っ張る、あのピュッと引っ張るものを「プルリング」というんですね。「プル」というのは引くという意味でしょう。「リング」というのは輪です。昔は、ギコギコと缶切りで缶を切っていたのですけれど、今

は果物の缶詰だろうが何だろうがみなプルリングです。

しかし平生我々はいちいちプルリングなんて言わないでしょう。缶ジュースをもらって、いちいち「私はプルリングを引いて開けます」なんていう人はいない。だからプルリングという言葉を今日初めてお聞きになるという方もいるかもしれない。

私は十何年前に、毎日使っているんだけど、「へえ、あれをプルリングっていうんだ」と思いました。

「プルリング」という言葉を歌の中に普通は入れません。だけど、あれをキュッと引っ張って開けている感じが、いかにも内福の人という感じがしたのでしょ。

私が言いたいのは異国語の中の日常化した異国語だということです。同じ歌集の中ですが、

テポドンとデコポンの語を間違えし  
霧深き老い責めてはならず

「テポドン」と「デコボン」。ご存知ですね。テポドンとデコポンを間違えた、大きなものと小さなものを間違えたわけですが、笑えませんよ。だって私なんかしょつ

ちゅう間違えていますから。

これは「霧深き老い」というところに短歌語が出ていますね。いわゆる老人性の呆けの状態をいつているわけなんだけれど、それを「霧深き老い」といつている。奇麗な言葉ですよ。実際はテポドンとデコポンを間違えたって、別に何も日常的には差し障りがない。

だけど、この歌は「霧深き老いを責めてはならないよ」という伊藤さんの考え方を表すために、テポドンとデコポンを間違えたという一例を挙げている。そうするとどうなのでしょう。テポドンとかデコボンというの、我々の日常生活の中にもちろん入っていますけれど、これを歌の中に入れるというのはやや特殊でしょうかね。

でもこの歌の場合、やはり「霧深き老い」という言葉が、この歌人の歌人らしい言葉かもしれませんね。

省略語は何の略だろうか

バス停にスクワットしてゐる媼おそろしく長く元気に生きむ

バス停でスクワットしている媼。「媼」

というのは一種の短歌語です。

翁と媼というのがよく出てまいります。

「老人」とか「老い人」という言葉でいう場合もありますが、媼というとおばあさんだということがはっきりします。翁といえはおじいさん。

「おそろしく長く元気に生きむ」の「む」ですけれども、これは助動詞で、文語なのか口語なのか。決めてはいけません。決められません。じゃあ、どっちに入れますか。「バス停にスクワットしている媼」、これどう考えたって現代語じゃないですか。

ただね、「バス停に」という「に」、助詞、これは正確にいうと「にて」という意味で、普通は「で」ですよ。「バス停でスクワットしている」です。けれど伊藤さんは歌人ですから「で」を使いたくないので「に」を使っただけですね。

そうしますと、これは文語的な助詞の使用方ではないか。それから「媼」というのも短歌語ですから、どちらかというところ、文一致体の逆のほうですね。日常語なら「ばあさん」、あるいは「じいさん」といえばいい。媼とか翁というのは、昔からある

一種の尊称、尊ぶ言葉ですから、それを歌の中に入れることで、ニュアンスの質を高めます。

「おそろしく長く元気に生きるだろう」と言ったら、これはまったく我々の会話語と同じですから、普通の言葉です。「む」という助動詞を、これからの推測を込めて使うというのは、さっきの「バス停に」の「に」と同じで、やはり短歌的に修正しているわけですね。

もう一首、ちよつと特殊な言葉を出してみましようか。

立ち止まり眼閉じれば良く聞こゆ吹

雪く桜の緊那羅の楽

「聞こゆ」なんていうのは完全に文語です。「吹雪く」ももちろん、これは歌言葉だと思えます。特に「緊那羅」というのは、平生はまったく使うことのない言葉です。これは、天上の極楽から聞こえて来る、何とも言えない清らかな音楽のことを梵語——今までの「スクワット」とか「デコボン」、「テポドン」、「ブルリング」などが米語か英語、あるいはその俗語出身ですが、「緊那羅」は古代インドから仏教と共に

に日本に伝わってきたサンスクリット、梵語から来ている。

先程の歌の「バス停」ですが、普通にはこれでいいわけですが、私の友人で先年亡くなった塚本邦雄さんなどは非常に厳密でして、「バス停留所」ときちんと言うべきだ、「バス停」なんて省略は駄目だとおっしゃっていました。私は「私鉄の席にわずかまどろむ」という歌を作ったのですが、塚本さんがすぐに手紙をくれて、「僕は私鉄というのは使わない。ああいう略語は正確でない。

パソコンはパーソナルコンピュータと、やっぱりきちつというべきだ。テレビもテレヴィジョンと言うべきだ、ヴィジョンと書くんだ」と。それが塚本さんの説であります。しかし、「でも、君のこの歌は許せるね」とかいって褒めてはくれたのですが、本当に褒められたのかどうかよく分からないくらい厳密なことをいう人でした。

一般の人は「私鉄」といっていて、それが何の略語かも、ほとんど覚えていないでしょう。「バス停」にしたって、「えっ、バ

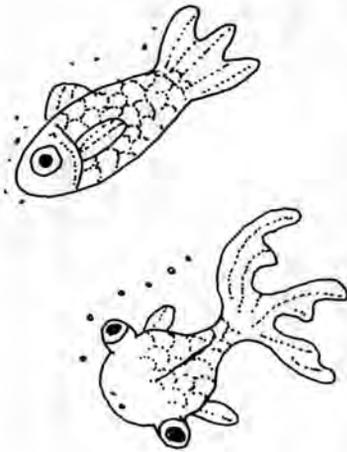
ス停留所、そういうえば「そうだね」ということとであります。

「スクワット」とか、あるいは今の「緊那羅」とか、こういう言葉というのは自分で見つけてこないといけないですね。

### 美しい言葉をやさしい言葉で包む

では、そういう言葉を見つけるといふことはどういうことなんだろう、ということですが、私はそのへんのところが一番大事な所だと思っています。

短歌というのは、元々はもちろんどういふ言葉で作ったつていいのです。今、我々が日常会話で使っている誰にでも分かる言葉をうまく組み合わせるというやり方もあります。



でもね、もう一つ、高野公彦さんという

歌人がいますが、この人なんかは非常にそれをやっておられますけれど、いろんな本を見ます。そうすると自分たちの知らない単語が出てきます。その中から高野さんが「ああ、響きがいいな」と思う言葉をキュッと掴んできて、それを一首の中へ入れる。そうすると何でもないことをいっているのですが、その部分だけがキュッと光るのです。

私は、それはどういう意味かなあと一生懸命辞書を引いて、そうかこういう言葉があるんだとわかる。歌そのものも面白いが、歌を辞書を使って読むという行為もなかなか面白い。

単純に短歌を作って、それを読む。それはそれでいいと思うのですが、せっかくやや特殊な文芸に関係しているのだったら、日本語の中にもいろいろな言葉があるのだというようなことを考えてみたらどうでしょう。

口語的とか文語的とかそういうことと別の感じで、自分の中に平生あまり人が使わないような、日常語では使われないような不

思議な言葉、しかし美しい言葉、そういうものを一つ入れて、あとはやさしい言葉で包んでいく。そういうような歌の作り方というものが一つあっていいのではないかなと思うのです。

### 比喩を用いての作歌

文語的とか、口語的ということを超越した形で面白いものを作り出すという方法の一つとして、比喩というのがあります。

Aというものをいうために、Bというものと比べる。普通はAというものは未知のもの、訳が分からないもので、それをよく知っているBというものによって諭える。AはBである。AはBに似ている、というようなことをいうのが比喩でありまして、我々の短歌の中にも結構出てまいります。

伊藤一彦さんのこういう歌があります。

軍艦のような女と戦闘機のような女  
の間にいたい

軍艦のような女、戦闘機のような女。軍艦とか戦闘機というのは、人によって随分、内容が違ふと思います。

伊藤さんは何かこう、女の人に対して恐

怖を抱いています。軍艦のような女が右側にいて、左側に戦闘機のような女。私はめちゃめちゃ打たれ続けているんだという、一種の恐怖感だと思う。

誰さんがこういうことをやったとか、ああいうことを言ったとかいうよりも、「軍艦のような」とか、「戦闘機のような」ということで通じるある世代があるわけです、そういう世代に向かって比喩の言葉を使っている。

万斛の涙の中のいつてきをうくるがごとくに目薬をさす

目薬にもつていくのに「うくるがごとくに」というところまで長々とやるんですね。要するに目薬をポトツと一滴落とす。その一滴は何かという、万斛の涙。「斛」という字は石と同じ、加賀百万石の「石」というやつです。加賀百万石の場合はお米の俵の量でありますけれど、この場合は涙でありますから水分です。

万斛の涙の中の一滴をブツツと自分は受けているような感じがして、目薬を今さしましたよといっているんですね。目薬をさしている時、自分の背景に万斛の涙があ

る。本当に心の底から悲しくて、涙が後から後からもう無量に流れてくる、その涙の一滴なんですよ、これは、という歌です。こういうふう「ごとく」を使っている比喩もあります。

南より北に広がる羊らのすきますきまに空の青の子

南より北に広がっている羊の群れ。その羊たちのすきますきまに空の青の子。つまり、南から北にずーつと羊雲が広がっていて、羊雲と羊雲のすきますきまに青空がちょっと見えているという情景ですね。そんなのはしょっちゅうあります。羊雲ですから秋から冬にかけてですかね。

彼は「羊雲」と言わないで「羊」といつている。ということは、空を見ていると羊がいっぱいいるんだ、あそこに牧場があるんだ。で、羊ばかりじゃないんだ。羊と羊の間に青の子供がいるんだと。それで、羊雲の移動の具合によっては青の子供が増えたり減ったりする。

この歌なんかは、「何々のごとく」とか、「何々のような」といつていませんけれど、私たちがこういう歌を読みますと、読み慣



れていれば、これは羊雲がいっぱい広がっていてその間に青空がのぞいている、という空の景色を歌っているとわかります。

「羊のようだ」とか「羊雲」といわないで、「羊だ」とはつきりいつている。ほかでもない、空に本当に動物の羊がずっと飼われているんだ、その間に青の子供が増えたり減ったりしているんだと、そういうふうにズバリというのが、これが要するに詩における、あるいは短歌における比喩というものの、一つの技巧ですね。これは、私も日常会話ではやりませんね。「似ている」とか、「何々みたい」というのは使

ます。あるいは「何々のようだ」というのはね。

私どもは、羊だとか青の子なんていわれ  
ても、あんまり驚かない。つまり、ああ、  
なかなか綺麗な歌だなあ、片方で、ブルリ  
ングがどうか、デコボン、テポドンとの  
違いとか、そういう通俗的なことも言うけ  
れど、片方ではこういう綺麗な比喩も使  
う。もう一首、読んでみましょうかね。

満月の光に焚かれ妻歩む川筋の道わ  
れは遅れて

満月の光がわあつと射して、それが妻の  
ところにいっぱい、いっぱい集まっている  
ので、まるで満月の光で妻が焼かれてい  
るような、そんなすさまじい満月の光景。そ  
の川筋の道を私は妻から少し遅れて、満月  
に焼かれている妻の後ろ姿を見ながら、歩  
いていますよ、という歌ですね。

これは奥さんの歌でもあると同時に、  
やっぱり満月の光のすさまじさというよう  
なものを詠っているのだと思います。この  
時に「焚かれる」という比喩を使ってい  
る。実際に、月光で奥さんの体が焼かれる  
わけではない。これは一種の誇張法だと思

ますけれど、こういう誇張した表現で、  
「ああ、そんなにすごい満月の光だったの  
か」と我々は思うわけですね。こういう、  
何でしょう、ひとつの転換というのが、比  
較をする喩法というもので行われます。

これはほとんどが、我々の日常会話の世  
界には出てこない、詩独特、短歌独特のも  
の言い方です。そうしますと、むしろ文  
語だとか口語だとか、どちらが現代語、つ  
まり我々の会話語に近いとかいうような、  
そういう話よりも、我々が平生日常会話の  
中で使っている語彙の乏しさとか、絶対使  
わない枕詞とか、絶対使わないであろう比  
喩法だとか、そういったものを短歌の中  
に取り入れて歌を作る。そのこと自身が日常  
語離れをしているわけで、むしろ、日常語  
の世界を克服して、もう一つ高い世界に  
入っていく。言葉の芸術でありますから、  
言葉の芸術というのはやはり、そういうこ  
とが大事だと思つのです。

### 新しい試みの思い出

私どもは、もう十数年前になりますけれ  
ど、京都、名古屋、大阪、東京で若い人た

ち、私よりも何十歳か若い人たちを集め  
て、歌会を十年くらい続けておりました。  
京都の方々には非常にそういうところで先端  
的なことをやらねばならず、今まで誰も考え  
たことのないような新しい比喩というのは  
ないだろうか。

例えば、今、とても暑い気候の中で生活  
している。この暑さ、特に今年の夏の暑さ  
を表現するのに、普通だったら「やけるよ  
うな暑さ」だとか、「水を浴びたくなるよ  
うな暑さ」だとか、我々が平生使っている  
ようなごく普通の表現があります。

でもそうではなくて、歌の五七五七七の  
中にピシッと入ってきて、「へえ、そうか、  
そういう言い方もあるのか」、「なるほどそ  
んな新しい比喩の仕方もあるんだ」という  
ようなものはないかと。そういう試みは失  
敗すればゲテモノになる可能性もありま  
す。だけど、そういう誰も捕まえたこと  
のないような比喩法を考え出して、次の歌会  
の時には持つてこようじゃないかという、  
新しい比喩の発見くらべですね。そういう  
のを何年かやりました。

そんなことを口に出して言ったわけじゃ

ないですよ。誰かがそういうことを始めて、「あ、面白いな、ああいうやりかたもあるなあ、じゃあ、今度、俺も考えてこよう」という雰囲気だったのです。

川の流れに白鷺が立っている。その姿をそれだけで捉えないで、あの白鷺は何に似ているのか。これを、人の考えつかないような何かで表現してみたらどうなるか。そういう、新しい比喩探しというのを、しばらく皆でがんばってやった思い出があります。今でも多少そういう傾向はありますけれどね。やはり比喩ってね、新しい表現で言われるとね、ハッと気がつきますよ。「白鷺が川の中を歩いているあの姿というのは、何々のようだ」という形で言われると、つまり物の本質が何か別の光で照射されますとね、新しいものが出てくる場合があります。

### 新味のあるものを求めて

ですから私は、今日お話ししたような口語的な表現と文語的な表現というのは、片方は歴史的なものだし、片方は現在の我々の日常生活から出てきている言文一致の気

持ちというものでして、両方ともあり得ると思うのです。短歌というのは文語なんだというようなことを決めない。

あるいは現代詩というのは、必ず現代の我々の日常語の中から出てくるべきものだなんで決めつけない。そうではなくて、さつき言いましたように、何か読んでいたり、それこそスーパーなんかに行っているんな食品の説明なんかを読んでいるだけでもいいと思うのですけれど、「この果物の名前はあんまり聞いたことないが、これを歌の中に活かすことができないかな。何ともいえないこの色というのを、何か活かせないかな」と、平生あまり人が歌の中へ入れないような言葉、つまりボキヤブラリーですね——外国語の「ブルリング」とかそういうのでもよろしいですし、「緊那羅」というような昔からの言葉でもよろしいし、それから、「内福」というようなちよっと漢詩みたいな言葉でもかまわない。とにかくそういう言葉を一つ掴んで来て、それを歌の中に入れてみたらどうだろうか。それが一つですね。

もう一つは、まだいっぱいありますよ、

いっぱいありますが、「何々のようだ」「何々みたいだ」「何々の何々」というような比喩、喩法の中で、何か新味のあるものはどういう比喩だろうかということですよ。「絵のように美しい」と、「虹のような希望を抱く」。これは普通に使われている。

そうではなくて、希望をいう時に虹を持って来ないで、何か別の面白い、それでいて、「あ、なるほど！」と人に思わせるようなものを、探し当てていくことはできないだろうか。

詩集を読んだり歌集を読んだり小説を読んだり、あるいは全然関係ない新聞記事の中からだって言葉は拾えます。

そういう意図を持って短歌を作っていくというのは、やはり短歌を一つ新しい詩の中へ入れていく方法ではないかなと思うわけですよ。

今日これから、私も含めて選者が選んだ歌についての講評とかいろいろあるかと思いますが、私が今お話し申し上げたようなことをちよっと頭の隅に置いて、お聞きになったらどうかと思います。

では、今日はこれで失礼します。